

「文字」の存在と古代官衙

古代の日本における識字率

現在、日本の識字率はほぼ 100% と言って良い状況です。世界的に見ても日本は古くから識字率が高く、室町時代 (1443 年) に日本列島を訪れた朝鮮通信使の申叔舟は、著書『海東諸国紀』(1471 年刊行) に「日本人は男女身分にかかわらず全員が字を読み書きする」と記しています。全員とはさすがに誇張でしょうが、当時の識字率の高さを物語る貴重な史料と言えます。

しかしながら、これより遡ること数百年前の奈良時代・平安時代においては、文字の読み書きができるのはごく限られた人々でした。代表的な例を挙げると、貴・通貴や貴族、下級官人、そして僧侶。貴とは、位階 (官人の位) で三位以上の人、通貴とは四位・五位の人を示します。この人達は、知識階級ですので当然字の読み書きができました。六位以下の官人も、お役所勤めのためやはり文字の知識が必要となります。一方僧侶は、お経を読まなくてはならないので文字を学ばなくてはなりません。つまり、文字が書かれた遺物または筆記用具が出土する遺跡は、何らかの官衙施設か貴・通貴・官人の邸宅、そしてお寺が存在した可能性が高いということになるのです。

吉田遺跡出土の文字資料

吉田遺跡では、墨で文字が書かれた土器、通称『墨書土器』が複数発見されています。書かれた文字には、『富』『主』そして『官』などがあります。『富』は繁栄を願う祝い文字もしくは地名の略字 (鎌倉時代初頭に吉田の地に成立する「恒富保」に関わるものか)、『主』は「つかさどる」という意味で官衙 (官人) の役割を示す文字と考えられます。さらに『官』の文字の存在は、この地に官衙が存在した可能性を強く示唆しています。

また、墨で文字を書くためには硯 (すずり) が必要となります。吉田遺跡からは、粘土を焼いてつくった硯である『円面硯 (えんめんけん)』が多数出土しています。また、調庸 (ちょうよう) など都に送る税物に付けるための『荷札木簡』も発見されています。



『官』



『主または卅』



『安』



『富』



『主』と『井』